

(仮訳：原文はドイツ語)

デューン・ノルトライン＝ヴェストファーレン (NRW) 州経済大臣

ガイゼル市長、

御列席の皆様、

デュッセルドルフの日本の新総領事として、このように今晚皆様をお迎えできますことは、私にとり大きな喜びです。まずはお寒い中、またクリスマス前の御多忙にもかかわらず、天皇陛下の 82 歳の誕生日をともに祝うためにこれほど多くの方々にお集まりいただいたことに対し、心から感謝申し上げます。州政府の代表としてお越しいただいたデューン NRW 州経済大臣、また州都デュッセルドルフのガイゼル市長にはこのあとで祝賀の御挨拶をいただくことになっており、特に感謝いたします。

はじめに、手短に自己紹介させていただきます。私は 3 週間と 1 日前、新しいデュッセルドルフ総領事として着任しました。しかし、すでにこれまでの僅かな期間中、知り合った NRW 州の多くの方々から全面的な支援の表明をいただきました。このようにたちどころにして、日本人にとっての「投資先としての NRW 州」の重要性が私にとり明らかになったわけであります。すなわち、デュッセルドルフというのは私たち日本人にとり快適で、我が家のように感じる土地である、ということです。しかし同時にこのことは、当地における日本人社会がこれまで、NRW 州の経済、文化、社会生活全般に関し、いかに大きな貢献を行ってきたかの証であるとも思っています。

このように考えるにつけ、デュッセルドルフにおける日本の在外公館の代表としての責任というものがどれほど大きいのか、また私の任務もそれに応じて重大であることを再認識している次第です。今の時点では私としては、このような責任と任務をどの程度果たすことができますかは分かりませんが、NRW 州における日独間の友情と協力の強化のために最善を尽くしたいと思っています。

さて、今晚の本題に入りたいと思います。きたる 12 月 23 日、天皇陛下は、82 歳の誕生日を迎えられます。御高齢にもかかわらず、陛下は国内外でなおも非常に活発に公務をこなされています。例えば、本年 4 月には、南太平洋の島国パラオを公式訪問され、日本人の戦没者のみならず、アメリカ人の戦没者を想い、平和のために祈りを捧げられました。日本国内においては、皇后陛下と御一緒に、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の被災者に対する精神的支援をたゆむことなく継続されています。私たち日本人は、陛下の不断の健康と幸福を願っています。皆様にも願っていただければ幸いです。

ご列席の皆様、

この場をお借りして、日本とドイツの関係について少し話をさせていただきたいと思います。本年は、日独間でハイレベルの訪問が多くあった年となりました。4月にはメルケル首相が日本を訪問しましたし、安倍総理は6月、バイエルン州のエルマウで行われたG7サミットに出席しました。日独両国の協力は、単に儀礼的な性格のものではなく、相当程度の内容を伴うものであります。

例えば、安倍首相は、ウクライナ危機等に関する議論の際にメルケル首相を強力に支援しました。逆にメルケル首相は、「海上の安全保障」の議題においてリーダーシップを発揮し、その結果、サミットの最終宣言の中で、東シナ海・南シナ海情勢に関する参加国首脳による確固たるコミットメントが記載されることとなりました。その中核は、現状を変更しようとするあらゆる一方的措置を拒否する、ということでもあります。

連邦レベルと同様、NRW州と日本との間にも今年は非常に活発な交流がありました。本日の賓客であるお二人は、その中でも特に重要な役割を果たされています。ガイゼル市長とは、赴任する前に日本でお会いしました。そして、たった今聞いたところなのですが、デューン大臣は、NRW州との福島とのコンタクトを確立する上で、州政府において発案者となられたということでもあります。

来年のことにつき、1点だけ申し上げたいと思います。それは、デュッセルドルフ日本商工会議所が来年6月に設立50周年を迎えるということです。このことは、過去半世紀におけるNRW州における日本人社会の成果を想起するだけでなく、その基盤の上に未来を見つめ、次の半世紀におけるNRW州内の日独間の共存のあり方がどうあるべきかを考える機会となりましょう。

私たち日本人としては、来年1年間、日独関係の深化にどのように貢献するかについて熱心に取り組むでしょう。ドイツ側からも同様の努力がなされるものと思います。このようにして、今後半世紀にわたる日独間の良好な協力のための刺激が生まれるとしたら、私にとってこの上ない幸せです。

最後に、今宵の楽しいひととき、楽しいクリスマス、来年における皆様の健康と成功、更には良き新年を迎えられますことをお祈りします。御清聴ありがとうございました。